

## 独立後のヒンディー語小説とビーシュマ・サーハニー

ハリモハン・シャルマー

Prof. Harimohan Sharma

デリー大学ヒンディー語学科長・教授

(翻訳：岩瀬安奈、竹中李香、片平英里)

独立後のヒンディー語小説はいくつもの流派に分けられる。独立直後のヒンディー語の小説は精神分析学に影響を受け、そこには実験性も存在する。例えば、ジャインネンドラ、アギーイ、そしてイラーチャンドラ・ジョーシーの小説は精神分析によってまとめられ、ダルマヴィール・バールティー、デーヴァラージなどの小説は実験的な伝統を発展させた。社会主義思想に関連して、ヤシュパール、バガヴァティーチャラン・ヴァルマー、ウペンドラナート・アシャクたちがプレームチャンドのリアリズムの伝統を推し進めると、もう一方では歴史的小説において、事実と仮想が創造的に混合することによってヴリンダーヴァンラール・ヴァルマー、ハザーリープラサード・ドヴィヴェーディー、ラーンゲーイ・ラーガヴなど、歴史と仮想が堅く結びつき、独立運動の小説の新しい流派ができた。そこには農村地域の生活や社会自身がまとまりのある、活動的な形で存在する。農村部をよりどころとしてラーヒー・マースーム・ラザー、シヴァプラサード・シンハ、ラームダルシュ・ミシュラも各々の地域の問題、貧困、そして矛盾を表現している。

60~70年代の後、ヒンディー語の小説は内容、技巧の両方の点から質の変化が見られた。この時の小説は空間と時間のおびただしい問題、疑念、反抗、対立や皮肉を備えていた。クリシュナ・ソープティー、ラージェンドラ・ヤーダヴ、ビーシュマ・サーハニー、カムレーシュヴァル、マンヌー・バンダーリー、ニルマル・ヴァルマーなど何人もの小説家が身の周りで経験した実際の生活を新しい慣用語句で表現しようとした。この新しい慣用語句は、インドの新しく勢いついてきた中産階級の中の葛藤によって生まれた。この時インド社会は徐々に都市化していった。そして働く中産階級の問題、反抗やその他の状態を自身の作品に印象的な方法で書いていった。社会経済の不平等、政治の皮肉、価値のなさや墮落に関していくつかの重要な小説が出版された。その中で

は、シュリーラール・シュクルの“रागदरबारी”が重要とされる。一方、シュールレアリスム様式で書かれたヴィノードクマール・シュクル、ウダイ・プラカーシュなどの小説も重要である。ヤシュパールやビーシュマ・サーハニーは社会主義の系統を推し進めながら、自分の話や小説を書いている。書き進める中で、彼らは中産階級の役割を自身の作品の原点にした。

小説家として、ビーシュマ・サーハニーは自身の歴史を語りながらも、生き生きとした実際の描写をしており、その中で自分が過ごした時間を目いっぱい表現している。批判する人々は、彼の小説を自分が過ごしてきた時間の歴史を書いていると言う。有名な物語作家であるラメーシュ・ウパーディヤーイの主張である。—「“झरोखे”では、彼は自分の子供時代から青年に至るまでの個人的な歴史を書いている。また、“कड़ियाँ”では中産階級の生活様式や家族内で起こった変化の歴史。“बसन्ती”ではある成長する大都市で興隆、衰退していく人々の歴史、また、“मय्यादास की माड़ी”では封建時代の町が資本主義時代の街に変化した歴史。“कुन्तो”では、家族、社会、そして国で起こっている変化の中で変わった、女性の暮らしの歴史。“नीलू-नीलिमा नीलोफर”では、ヒन्दゥー教徒とムスリムのコミュニティー間の愛や憎しみの新しい関係の歴史。そして、彼の有名な小説“तमस”は独立と分割のちょうど前のコミュニティーの不安の歴史である。」(ビーシュマ・サーハニー:ラメーシュ・ウパーディヤーイ、p.47) この長い主張は本当の部分はさておき、ビーシュマ・サーハニーの小説の率直な評価以上である。

ビーシュマ・サーハニーは近代の生活の一部を多く取り入れたいくつもの小説を書いた。それらは社会的、政治的な小説といったほうがより適切であろう。それぞれの小説家は、自身の人生における実際の出来事や行動と想像を混ぜ合わせてコアな話を創作する。そしてそれを真実味を帯びたものにするのである。

彼の最初の小説は「格子窓(झरोखे)」と「鎖(कड़ियाँ)」で、自叙伝風の物語である。しかしそれらは自伝の様式を破壊するものでもある。このふたつの小説の中で善良な筆者の周りの境遇が描かれている。しかしながら、ここには様々な地位において現れるインドの中流階級の歴史的な性格が明らかにもされている。小説家はその境遇をごくごく近くで知り、理解をするように思われる。実際あなたがどのシチュエーションの話を取り上げるかというのは重要なことではなく、あなたがどれだけ親しみや熱意を持ってその話に生命を吹き込むかが重要になるのだ。ビーシュマ・サーハニーは自身が歩み、判断してきた境遇によって筋道を立て、自身の社会における矛盾、葛藤や困難、そして墮落しつつある気持ちを作品に表出した。この方法によって社会と家族の中に訪れる変化を描写したも

のが小説なのである。

「バサンティー(बसंती)」彼の最初の重要かつ影響力の高い小説である。この話は都会の中で新しく勢いのある下層階級の話だと言われている。この中には、我々の現代社会の女性同士の不仲の話があり、その中で登場人物は貧困と同時に絶え間なく続く難民の苦しみも経験する。何人かの研究者は「バサンティー」を、下層階級の女性を中心に書かれた、力強い小説だとも言った。

この小説の中で下層階級の身の上であるバサンティーの生活の胸を打つような話は、多くの階級において戦いがなされる話だと言われている。彼女は自身の父によってブラーキーダルジー(बुलाकी दर्जी)に売られてしまったにもかかわらず、自分の恋人であるディーヌーを忘れることができなかった。善良なブラーキーダルジーは彼女を愛情たっぷりに育て、食事を与えた。しかし彼女はダルジーと共に住むことなく、そのコロニーのなかの別の家で、仕事をしつつ自分の生活を送っていた。彼女はディーヌーの家族も養おうとしていた。そのために彼女はディーヌーと協力してダーバーをやっていた。しかしある日ディーヌーは彼女を捨てて自分の村に帰ってしまう。彼女はひとりで住んでいたが、その一方で警察の人間が道端の物売りを追い払おうとして彼女のダーバーを壊してしまい、バサンティーは再び難民になってしまう。しかし彼女は負けなかった。ここからわかるように、ビーシュマ氏はバサンティーを通してひとりの生き生きとした力強い人物そして人間のあるべき姿を描写している。

このようにして「クンティー」という小説を介して、ビーシュマ氏は女性の自立によって昔のインド社会が反映されることを言及した。ここではいくつかの中流階級の家族の話が同時に描かれており、当時の社会関係が垣間見える。父権的な社会の間で女性の地位を明らかにすることをおそらく中心の主題としている。後に、ビーシュマ氏は「ニールー ニーリマー ニーローファル」によってヒンドゥー・ムスリム間のコミュニズムとふたつの父権的社会のもつ活力を描写した。おおよそは女性の自立への反対である。小説においてニーリマーがヒンドゥーで、ニーローファルがムスリムである。両者の家庭の名前をニールーという。ニーリマーはある一人のムスリムの青年を愛しており、ニーローファルもまたヒンドゥーの青年を愛していた。ニーリマーの父親は中流上層階級との関係があったため、少し寛容な考え方をしていた。しかし、父の母、すなわちニーリマーの祖母がこの関係に反対していたために、彼女はムスリムの彼と結婚することは叶わなかった。しばらくののちに彼女はヒンドゥーの男性と結婚をしたあと、もちろん侮辱され、抑圧されていたのである。ニーリマーは自分の結婚

生活が報われるように努力もしたが、不可能な状況であったために彼女は父親のもとへ帰ってきた。そして彼女は戦いながらも徐々に自身の生活を支えていったのである。

このようにムスリムの境遇においてニーローファルは新たな教訓を理由にして、ムスリムコミュニティを捨ててヒンドゥーの青年と結婚した。しかし保守的な彼女の兄はニーローファルを実家に連れ戻した。兄はニーローファルにヒンドゥーの夫がイスラムの教えを認めるまで夫の元に行くこと、また生活を共にすることを禁止した。しかし小説の最後には彼女は母親の助けにより、兄の束縛から逃れることだけでなく、ヒンドゥーである夫のもとに帰ることに成功している。以上よりこの小説はヒンドゥーとムスリムのコミュニズムそして男性優位の思想に対する女性の闘争の実際の物語であり、ビーシュマは喜劇として描いている。

インド独立に関係する『タマス』はビーシュマ・サーハニーの有名な小説である。この小説は英国統治のもとで、表面上ヒンドゥーとムスリムが共存していたけれども、英国が双方の宗教の違いを利用し、そのヒンドゥーとムスリムという異なる宗教とコミュニティという限定的統治を進める以前にはもう既にヒンドゥーとムスリムが分離していたことを描写している。仮にこの小説の根拠がビーシュマ・サーハニー自身の記憶や想像にあったとしても、実際の主要な事件が描写されていることは確かなものである。この小説はインドの統合された歴史と英国の統治の在り方を明らかにしている。及び大衆が宗教を第一義のアイデンティティとしてその中で熱狂したと同時に、それは大衆の衰弱した状況に光をさすものであったということも明らかにしている。双方の中には人間的な善意というものが消え始め、ヒンドゥーとムスリムはお互いに争い合う状況に至ってしまった。この状況において自由主義的な力すら無意味になり、“暴力”と“非人道”という視点は読者の心に恐怖を湧き立たせるものである。実際に『タマス』の大半は人間関係の崩壊や人間の心に潜む残忍性や嫌悪感を描いている。宗教、統治、帝国主義そして男性優位の思想に基づき、物語の構成の中で、男性の活力すべてが野蛮な形として表現されている。また内在する利害関係は第一に暴動を煽るものであった。それは再び権力と言う恐怖によって“平和運動”の中で取り入れられ始めたのである。

この描写は現実の“暗黒時代”において民衆の正しい気持ちが崩壊し、さらに不自由の中で生きる民衆が一瞬の繁栄のために欲深く暴力的になり、強奪をすることですべてを壊滅させたことを表現している。ビーシュマは独立時の暴動

において女性に対して身体的にも精神的にも暴虐があったことを示している。その中にはヒンドゥーとムスリムが“ひと”ではなく“動物”になりさがったことを表わしている。もっとも所々“ひと”である証拠は得られるのだが、実際にそれはかなり少ない。このように『タマス』はヒンドゥーとムスリムの心の底に横たわる不信感と心的距離の遠さを示し、作家はその状況を恐怖に満ち満ちた描写をしている。そしてこの小説こそが現実状況を如実に表現しているのである。

結果としてビーシュマ・サーハニーの小説はインド社会において新しく生じた下級階級と中級階級を詳細に描いたものであると結論付けることが出来る。この小説の中で、彼は比較的に下級階級の女性に対して同情していたことが読み取れる。彼はいくつか漠然とした作品を残しつつも自身の小説と物語を介して非常に多くの社会状況や暴動について伝えている。独立運動におけるヒンディー語の小説は人間の不完全な真理を描写することが出来た。なぜなら人間の成長は終わることがなく、その中には多様を孕み階層化しているからである。故にどの小説家であってもすべての人の正当性を描くことは不可能であったはずである。ビーシュマ・サーハニーの文学におけるその特徴は鋭い感性をもって描かれていることである。よって彼のいくつかの作品と『タマス』は独立時代におけるヒンディー語文学において、今後もビーシュマの名を今馳せらせるものとなるであろう。